

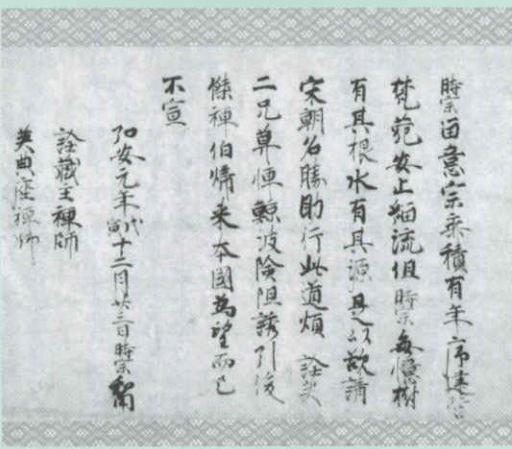
006223

拝観志納金

大人 三百円

¥300

重文 北条時宗書状



鎌倉五山

大木山 圓覚寺



つ

禅のこともっと…
 臨濟禅・黄檗禅 公式サイト
<http://rinnou.net>
 臨濟宗黄檗宗連合各派合議所
 写真・田口 節



そ

禅のこともっと…
 臨濟禅・黄檗禅 公式サイト
<http://rinnou.net>
 臨濟宗黄檗宗連合各派合議所
 写真・田口 節



よ

禅のこともっと…
 臨濟禅・黄檗禅 公式サイト
<http://rinnou.net>
 臨濟宗黄檗宗連合各派合議所
 写真・田口 節



う

禅のこともっと…
 臨濟禅・黄檗禅 公式サイト
<http://rinnou.net>
 臨濟宗黄檗宗連合各派合議所
 写真・田口 節



と

禅のこともっと…
 臨濟禅・黄檗禅 公式サイト
<http://rinnou.net>
 臨濟宗黄檗宗連合各派合議所
 写真・水野克比古

津要断要

禅のギリギリの一句、四句を離れ百非を絶した一句、その最後の一句に到って初めて、堅実な閑所に到ることができるところである。この禅の窮極のところ、そこに徹するならば、仏もなければ凡夫もない、悟りもなければ迷いもない、と。そういう境地がひとつ分かれなければいかん。禅の問題に向かったならば、真つ向から正宗の名刀をふりかぶって見せられたようなもので、そこに一分の隙でもあったならば、たちまち命を取られてしまうであろう。また、盤山宝積禪師は、刀を空中で振り回すようなもので、当たるとか当たらないとかということをおぼえておられる暇はない、と言われている。

《原典・碧巖録／引用・山田無文著『無文全集』第三卷『碧巖録Ⅲ』(禅文化研究所)より》
 ※このしおりを巻末至二十四種類のしおりと禅語はインターネットでご覧いただけます。

と 独坐大雄峰

何と爽快な一句ではないか。これしかないであろう。めいめいが生きて、そこに坐っておるといふ事実以上の有り難いものはない。金が有り難いか、屋敷が有り難いか、身分が有り難いか。生きておるから金があるのだ、生きておるから屋敷があるのだ、生きておるから出世も悪くないのだ。一番大事なのは、今ここに生きておるといふことだ。言うならば、釈迦も達磨も、俺が生きておるから苦勞されたのだ。俺が生きておるから太陽が照つておるのだ。俺が生きておるから空気があるのだ。丈云く、独坐大雄峰。俺が今現に生きてここに坐つておることが一番有り難い、と。

《原典・碧巖録／引用・山田無文著『無文全集』第二卷『碧巖録Ⅱ』(禅文化研究所)より》
 ※このしおりを巻末至二十四種類のしおりと禅語はインターネットでご覧いただけます。

円覚寺は、瑞鹿山円覚興聖禪寺と号し、臨濟宗円覚寺派の大本山である。弘安五年(一二八二)鎌倉幕府八代執権北条時宗公が開基となり、中国の名僧無学祖元(仏光禪師円満常照国師)を開山第一世にむかえて開堂した。創建の趣旨は、国家を鎮護し仏法を紹隆すると共に、文永・弘安の度重なる蒙古の襲来で戦没した敵味方の霊をなくさるゝ為であった。

表の「北条時宗書状」は、時宗公が中国から名僧をかえる為に使者に託した書状である。時宗の自筆は「和南」のみとされ、詮蔵主禪師、英典座禪師は、使者として中国に派遣された僧で、建長寺開山蘭溪道隆(大覚禪師)の遺弟である。

北条時宗書状(書き下し)

時宗、意を宗乗に留むること、積みて年序あり、梵苑を建營し細流を安止す、但し、時宗毎に憶う、樹にはその根あり、水にはその源あり、是を以て宋朝の名勝を請じて、この道を助行せんと欲して、詮・英二兄を煩わす、鯨波の險阻を憚ることなく、俊傑の禪伯を誘引して本国に帰来せんことを望となすのみ、不宣

弘安元年(西十二月二十三日) 時宗 和南
 詮蔵主禪師
 英典座禪師

〒二四七〇〇六二 鎌倉市山ノ内四〇九
 電話番号 〇四六七(二二) 〇四七八

URL <http://www.engakuji.or.jp>

う 饑來喫飯 困來即眠

牛に騎つて我が家に帰つてきてみると、もう牛に用はない。もう手綱を持つておる必要はない。放つておいたらよろしい。(中略)草を食おうがゴロ寝をしようが、牛の思うままにさせておいたらよろしい。そして、もう牛というものは忘れてしまふ。その牛というものもなくなつてしまえば、仏性というものは実に閑暇なものである。何も求めるものはない。天地の間に求めらるものは何もない。飯に会うては飯を喫し、茶に会うては茶を喫するだけだ。飢え来たれば飯を喫し、困じ来たれば眠るだけだ。腹が減つたら飯を食い、眠うなつたら寝るだけだ。人生の終点に着いた景色である。

《原典・伝灯録／引用・山田無文著『十牛図』(禅文化研究所)より》
 ※このしおりを巻末至二十四種類のしおりと禅語はインターネットでご覧いただけます。

そ 曹源一滴水

法眼和尚に向かつて、僧が、「如何なるか是れ曹源の一滴水——六祖の流れをくんだ禅はいかがでござるか」と質問したら、法眼和尚が、「是れ曹源の一滴水」と、同じままを答えられた。(中略)：そう尋ねておるおまえの心が曹源の一滴水だと。同じ言葉で答えられておるが、これは相手の言葉を繰り返しただけと言えるかどうか。雲水の質問は同じ言葉でも、分かんから尋ねておる。法眼和尚は、「曹源の一滴水」の真実をそこに示しておられる。同じ言葉でもそこに大変な違いがあるではないか。

《原典・碧巖録／引用・山田無文著『無文全集』第二卷『碧巖録Ⅱ』(禅文化研究所)より》
 ※このしおりを巻末至二十四種類のしおりと禅語はインターネットでご覧いただけます。

つ 月在青天 水在瓶

月は青天に皎々と輝き、水は瓶の中に静かに収まっている。当たり前のことです。柳は緑、花は紅、眼は横に鼻は縦に、柱は縦に敷居は横に、犬はワンワン、猫はニヤンニヤン、カラスはカーカー、見るがまま、聞くがまま、あるがままの消息以外に法があるはずがないというわけですね。(中略)：月は青天に、水は瓶の中に、あるべきところにきちんとしてある、人間として当たり前のことを当たり前にやる、あるべきようにやっつけていく、これをおいて別つくり考えてみようではないか。私たちももう一度、あるべき姿をじっくり考えてみようではありませんか。

《原典・槐安国語／引用・細川景一著『白馬蘆花に入る』(禅文化研究所)より》
 ※このしおりを巻末至二十四種類のしおりと禅語はインターネットでご覧いただけます。